

## 吉野川流域における方言の動態（2）

仙波 光明<sup>1)</sup>・岸江 信介<sup>2)</sup>  
石田 祐子<sup>3)</sup>・山脇 さや香<sup>4)</sup>

### 1. はじめに

前号では、吉野川南岸流域にみられる方言の動態について1998年夏に行った徳島市～池田町間での方言グロットグラム調査の結果をいくつか掲げて報告した。今回は、前回に引き続き、吉野川の南岸流域で分布上、顕著な対立があるとみられる方言事象を中心に引き上げ、方言の動態と世代差について述べるが、当グロットグラム調査に続き、1999年夏には、更に徳島県全域を対象とした言語地理学的調査を実施した。吉野川流域のグロットグラム調査で扱った調査項目と共通するものをこの調査では多く含め、吉野川流域の方言調査結果と比較できるように配慮した。ここでは、徳島県下での言語地理学的調査の結果を吉野川流域方言と比較・対照するために随時取り上げることにし、全県レベルでの方言分布についても触れてみることにする。

更に徳島県方言を40年以上も前に精力的に調査した森重幸氏の調査データがある。現在、これらの資料を復元<sup>5)</sup>しつつあるが、次回以降、扱う項目と関係がある場合には積極的に引用していきたいと思う。

### 2. 吉野川流域（南岸）にみられる方言動態

吉野川南岸のほぼ中流域にあたる山川町と穴吹町間にいくつもの方言境界線が認められることを前回指摘したが、以下では更にいくつかの項目を取り上げ、その動態について考察する。いずれのケースも吉野川中流付近を境にして方言形式が異なり、いわば東西型の分布を示す項目群である。ただし、このような分布形態をとるようになった背景にはいくつかのパターンが考えられよう。大きくは次の二つである。まず、第一のパターンとして、吉野川流域全域にAという形式が先に分布しているところへ徳島市方面からBという形式が拡がりだし、吉野川に沿って西進した。第二のパターンは徳島県西部の池田町付近を中

---

1) 徳島大学総合科学部教授

2) 徳島大学総合科学部教授

3) 徳島大学大学院人間・自然環境研究科1年

4) 徳島大学総合科学部4回生

5) 故森重幸氏が昭和37年に阿波学会で発表した『分布図からみた徳島県の方言』のガリ版刷りの発表資料が徳島県立図書館に保存されているが、印刷が薄れ、ほとんど読む（見る）ことができない状態であった。執筆者の一人である石田祐子がこの資料の何枚かをパソコンを用いて忠実に復元している。

心にAという形式が吉野川に沿って東進した。このパターンでは池田町の方言というよりも香川県西部方言が徳島県西部に入り込み、吉野川を東進したというケースが多いようである。この好例となるケースは吉野川流域におけるアクセント分布である<sup>6)</sup>。

以下では、これら2つのパターンのうち、西進型のパターンの一例として、断定辞に関する項目群を取り上げ、検証していくことにする。西進型のパターンを示すアクセント項目については次回以降に譲ることにしたい。

なお、標題は「吉野川流域における方言の動態」となっているが、吉野川流域での調査結果のほか、今回からは徳島県各地で集めたデータも紹介していくことにしたい。

### 3. 断定の助動詞「ダ」・「ジャ」・「ヤ」—断定辞関連—

前回、吉野川流域の方言動態を取り上げた。このうち、打消の助動詞「ン」と「ヘン」の対立（イカンとイケヘン）は西進型パターンの代表例であるといっても過言ではない。徳島市内を中心に用いられる「ヘン」は近畿中央部方言の影響によるものであり、徳島市に近畿中央部から飛び火したあと、「ヘン」は「ン」が拡がる吉野川流域を西進したものとみられる。このケースに酷似しているものとして、断定辞に関連する「子供なので」の「なので」にあたる形式がある。吉野川流域において、徳島市内方面から吉野川を遡り、子供ヤケンという形式が子供ジャケンに変化してきているという点を前号で指摘した。今回はこの点を更に詳細にみるため、その他の断定辞に関連する項目を中心に取り上げ、まず、断定辞形式に関する動態と変化について触れてみたいと思う。

断定の助動詞の全国的な分布は、東日本が「ダ」であるのに対し、西日本では「ジャ」という東西対立型の分布を示すことが知られているが、西日本の場合には、近畿地方から九州地方のかなり広い地域に「ジャ」から変化したとみられる「ヤ」が用いられる。近畿中央部及びその周辺ではこの変化が既に完了しており、老若ともに「ジャ」よりも「ヤ」を用いるのが一般的である。四国・九州地方及び中国地方においても、「ジャ」から「ヤ」への変化が進行中である。とりわけ、九州地方では中国地方に先んじ、各県とも若年世代ではこの変化がほぼ完了しているとしてよい。西日本各地には「ジャ」・「ヤ」のほかに、「ダ」を使用する地域がある。まず近畿地方では奈良県南部地方、中国地方では出雲及びその周辺、九州地方では熊本などである。西日本方言では東日本方言と比べて、断定の助動詞のヴァリエーションが豊富であるといえるであろう。

徳島県下の断定辞は、「ジャ」が有力であるものの、「ダ」・「ヤ」も同時に認められ、その使用状況は一様ではない。ジャは特に終止形（＝言い切り形）の場合にのみ多く現れるが、例えば、推量表現などの「雨だろう」、過去・完了の「行っただろう」の場合には徳島市方言及び徳島市周辺の方言では雨ダロー、行っただローという形式が用いられること

---

6) 徳島県下のアクセント調査については、吉野川南岸でのグロットグラム調査のほか、今年度実施した徳島県下の言語地理学でも調査項目として取り上げた。アクセントに関するグロットグラム調査結果の一部は既に金沢浩生・仙波光明ほか（1999）で紹介した。

が多い。この点については藤原与一（1962）・上野智子（1985）・上野和昭（1997）などの先行研究で既に指摘されてきた。また、「子供なので」にあたる形式として、前号で取り上げた子供ジャケンと子供ヤケンという対立と軌を一にする変化として、雨ジャから雨ヤへの変化（終止形にみられる変化）が徳島市域方言を中心に起きている。この変化は世代変化として認められるもので、終止形「ヤ」の使用は若年世代でその使用が顕著である。これは西日本諸方言においてみられる「ジャ」から「ヤ」への変化と歩調を合わせたものとみることができよう。

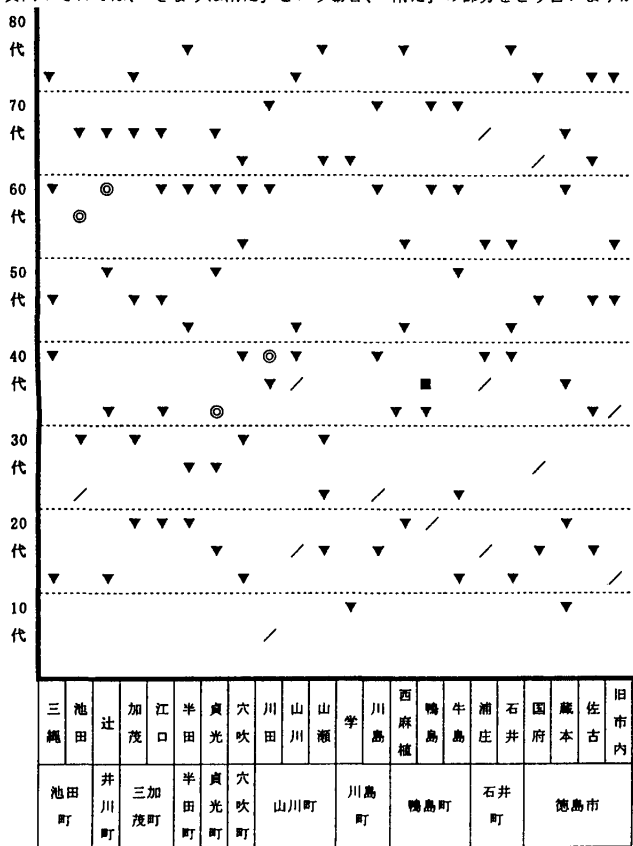
吉野川流域（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

徳島大学国語学研究室

1998

〔項目名 雨だ〕

質問：それでは、「きょうは雨だ」という場合、「雨だ」の部分はどう言いますか？



凡例

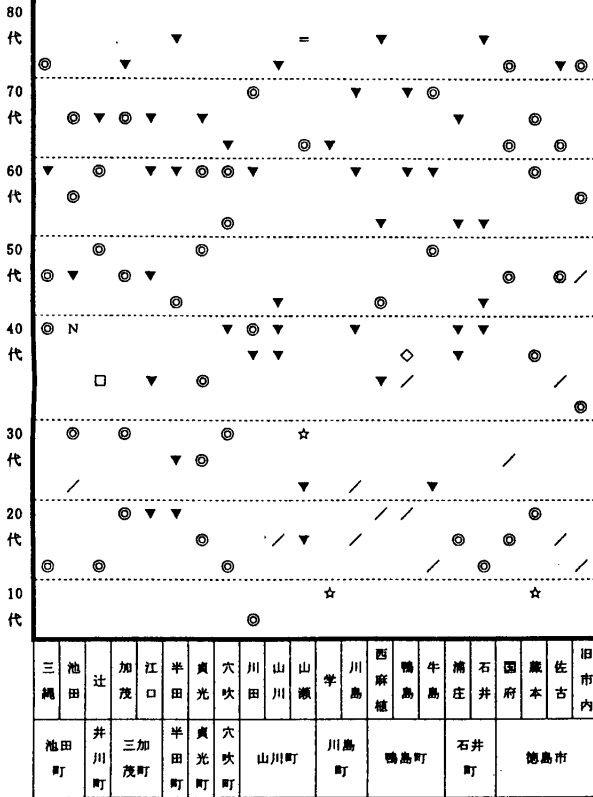
▼ 雨ジャ（雨ジャー） / 雨ヤ（雨ヤナー） ■ 雨ソ ◎ 雨ダ

表 1

吉野川流域（徳島市～池田町間）方言グロットグラム  
 徳島大学国語学研究室  
 1998

【項目名 雨だろう】

質問：「あしたは雨だろう」という場合、「雨だろう」の部分をどう言いますか。



凡例

- ▽ 雨ジャロー (ジャ・ジャワ・ジャー)
- ◎ 雨ダロー / 雨ヤロー (ヤナー)
- ☆ 雨チャウン (チャウカ)
- ◇ 雨ソ
- 雨カエ
- = フルカモワカラナン

表 2

表1では吉野川流域での「ジャ」と「ヤ」の調査結果を示した。言い切り形では「ジャ」が未だ優勢であるが、若・中年層で「ヤ」が用いられ出しているといえよう。「ダ」は川田以西の中・老年層にわずかに認められるにすぎない。まず、「ヤ」の分布に注目し、表1～表3をみると、「ヤ」は徳島市内の若年層を中心に使い出され、吉野川上流にむけて西進している様相を呈している。また、前号で紹介した「子供なので」にあたる形式の子供ジャケン<sup>7)</sup>、子供ヤケンで、「ヤケン」が徳島市内で用い始められ、吉野川を遡る状況について既に触れた。

7) 共通語「から」に相当する。

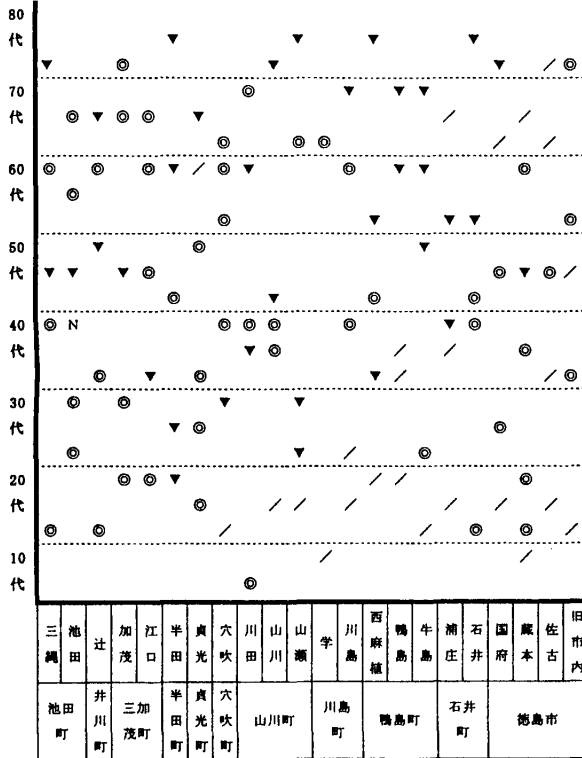
吉野川流域（徳島市～池田町間）方言グロットグラム

徳島大学国語学研究室

1998

〔項目名 雨だった〕

質問：「きのうは雨だった」という場合、「雨だった」の部分はどう言いますか。



凡例

▼ 雨ジャック / 雨ヤック ◎ 雨ダック

表 3

しかし、これらの調査結果を比較すると、「ヤ」と「ジャ」の分布は一応の傾向こそつかめるものの、各表で異なっており、同一であるとは言い難い。子供ジャケン、子供ヤケンなどは断定の助動詞が接続助詞に接続したケースであるが、表1の言い切り形の場合よりも、「ヤ」の方が「ジャ」に比べてよく用いられるようである<sup>8)</sup>。「ジャ」から「ヤ」への変化は言い切り形で生じたものではなく、このような接続助詞などに接続した形式中で先行し、それが次第に言い切り形でも用いられるようになったと推定することも可能であろう。

8) 上野智子 (1985) で既に引用されているが、藤原 (1962) は「ジャ」「ヤ」について、「ことによれば、『ジャ』終止形から『ヤ』終止形ができたのよりは、『ジャック』というのから『ヤック』ができ、『ジャロ』というのから『ヤロ』ができたのが、むしろさきではなかったか。言ってみれば、『ヤ』助動詞の成立では、連用形などのうごきが、きっかけになりはしなかったかということである。」と述べている。

つぎに推量表現の場合の「雨だろう」の結果(表2)と過去・完了の場合の「雨だった」の結果(表3)について検討してみることにしたい。表1の言い切り形と異なるところは「雨ジャロー」／「雨ダッタ」という形式に代わり、表2・表3ともに「雨ダロー」／「雨ダッタ」という「ダ」系の形式が多く現れている点である。このように不揃いとなるケースは西日本諸方言でも珍しいといえようか。徳島では「雨だ」という場合の言い切り形と「雨だろう」(未然形)や「雨だった」(連用形)の場合では断定の助動詞の形式が異なるという指摘(藤原1962)が夙にある。言い切り形の場合の「雨ジャ」の場合と「雨ダロー」「雨ダッタ」の場合とではその成り立ちが異なるということになるというのが一般的な見解であろう。すなわち、「雨である」「雨であろう」「雨であった」の「であ」が規則的に一齐に「ジャ」或いは「ダ」に変化せず、言い切りの場合は「ジャ」に、「雨だった」「雨だろう」の場合は「雨ダッタ」「雨ダロー」に分化した格好で変化したのであろう。表2・表3と表1とを比較してみると、この「不揃い」の状況が克明につかめるのである。断定辞「だ」を軸に考えると、「雨だ」の場合はもちろん「雨だろう」「雨だった」の「だ」も、雨ジャならば雨ジャロー・雨ジャッタ、雨ヤならば、雨ヤロー・雨ヤッタ、雨ダならば、雨ダロー・雨ダッタというように、それぞれセットにして考えてみたいのだが、徳島県下の方言ではそれが許されないようにも思える。

図1～図8は、岸江他が行った徳島県での言語地理学的調査<sup>9)</sup>結果の一部である。断定辞に関連する項目のうち、主要と思われるものを次ページ以降に掲げた。吉野川の流域のグロットグラム調査が各地点、古老層から若年層での5世代にわたる調査であったが、『徳島県言語地図』では各地老年層(70歳以上)の話者を調査の対象とした。徳島県下の断定辞については既に触れたように、調査研究および記述がある。まず、その分布に関する主な記述を以下に引用する。

上野智子(1985)

まず、「ジャ」は上郡・山分に、「ヤ」は灘に、より多く認められ、下郡・うわては、「ジャ」がいくぶん多いながらも、「ジャ」「ヤ」相半ばする状況と受け止められる。一方、「ダ」は、限定された用法であるにもかかわらず、地域による使用頻度は「ジャ」「ヤ」に比べて小さい。

---

9) 徳島県全市町村を対象とし、県下約210地点において臨地面接調査を実施した。調査項目は主に語彙・文法・表現法・アクセントなど。調査は徳島大学総合科学部の『日本語文化論基礎資料研究』、『日本語学』、『日本語文化論演習』(岸江担当)の受講生、四国大学文学部『国語語音声学』(岸江担当)の受講生によって1999年夏実施された。調査データの整理については、『日本語文化論演習』の受講生が中心となり、表計算ソフトのエクセルとデータベースソフトを連携させ、整理した。データベースソフトによる言語地図の作製手順については、岸江信介・中井精一・鳥谷善史・石田祐子(2000刊行予定)で詳しく述べているのでぜひ参照されたい。また、この調査での「徳島県アクセント」については岸江・石田が第70回日本方言研究会で研究発表を予定している。

上野和昭 (1997)

ジャ・ダ・ヤがある。ダは推量形のダロ (一)、連用形に過去の助動詞タや接続助詞テが付いた〜ダッタ・〜ダッテ (〜であって、伝聞ではない) の用法が中心。これに対してジャ・ヤは終止形も用いられる。〈海部〉ではヤが比較的多く、〈上郡・山分〉ではジャの比重が大きい。例：ホラホーダロ (それはそうだろう)、ホージャー (そうだ)

両氏とも、以下に提示した言語地図を既に見たかのように、正確に記述している点を評価したい。特に上野智子 (1985) では徳島県下各地の会話 (文) 資料をもとにして、県下各地の断定形式の使用頻度にまとめて示している (上記、論文中の表 1) が、以下の言語地図の調査結果とほぼ合致する結果であると判断する。

言語地図をみていくことにしたい。まず、図 1～図 3 を比較すると、図 1 の言い切り形で「ジャ」が圧倒的に多く分布するのに対して、図 2・図 3 ではそれぞれ「ジャロ (一)」「ジャッタ」の他に徳島市を中心とした徳島県東部域と県西部に「ダロ (一)」「ダッタ」が分布する。県中央部から東祖谷・木頭にかけては「ジャロ (一)」「ジャッタ」が優勢であり、これらの地域では言い切り形 (図 1) でも「ジャ」が優勢である。「ヤ」についてみると、図 1 と図 2 で「ヤ」が少なく、図 3 では徳島市内を中心に広がる様相を呈している。ところでこの徳島市域の「ヤ」は県最南域に分布する「ヤ」とは恐らくその成り立ちが異なると考えられる。なぜならこの地域では図 1～図 3、いずれも「ヤ」を回答しているからである。既に上野智子 (1985) が述べているように、この地域は過去に女性が行儀見習いのため、阪神地方に向くことが多かったため、阪神地方との繋がりが深かったということから「ヤ」は外部からもたらされたものかも知れない<sup>10)</sup>。「ヤ」はいずれにせよ、「ジャ」からの変化によるものであることは言を俟たないが、藤原 (1962) が指摘したとおり、言い切り形の「ジャ」が「ヤ」に変化したのではなく、やはり「だった」「だろう」で、この変化が先に生じ、次第に言い切り形にも及びつつあるであろう。言語地図では特に「だろう」よりも「だった」で「ヤ」が先行したといえそうである。また、図 4 は「雨だから」の「だ」の部分に注目し、地図化したものである。図 1 と同様、言い切り形 (終止形) にもかわかわらず、図 1 より「ヤ」の使用がかなり多い。すでに再三述べているように、吉野川グロットグラム調査結果の「子供なので」でみられる「ヤ」と「ジャ」との関連を併せて考えると、「ジャ」→「ヤ」の変化は「雨だ」のような言い切り形で発生したのではなく、「雨だった」「雨だから」などで先に生じたということができよう。

10) この他にもいくつかの理由が考えられる。一つは「ジャ」からの独自変化によるものである。ただし、先にグロットグラムの結果でみた徳島市内の若年層に生じている「ジャ」→「ヤ」の変化とは別に生じた可能性が高い。もうひとつ考えられる可能性は、阪神地方からの影響ではなくて、和歌山県からの影響である。かつて海上の行き来が盛んであったことと、「ヤ」以外にもいくつか言語事象の共通性がみられるからである。和歌山方言と穴喰町方言では、例えば、「行くわ」、「有るわ」とい場合に共に「イカ (一)」、「アラ (一)」と文末部の助詞が融合する傾向があったり、「シ」の音が「ヒ」となる傾向 (勉強して→勉強ヒテ) があったりする。そのほか、よく話題にされる接続助詞「サカイ」も当然和歌山方言でも用いられる。

次に「ダ」と「ジャ」の関係について考えてみることにしたい。まず、図1の言い切り形では上野智子(1985)の指摘と一致し、「ダ」の使用は2地点に過ぎず、ほとんどないと言ってよい。ところが、図2・図3では一転して、ダロ(一)、ダッタなど、「ダ」が現れる。吉野川の結果(表2・表3)も併せて参照願いたい。国語史における断定辞変遷の流れからいうと、「ジャ」と「ダ」はともに「であ」から変化したものであり、「ジャ」から「ダ」へ、あるいは「ダ」から「ジャ」への直接の変化を考慮することはあまりないようである。上野智子(1962)では藤原(1962)<sup>11)</sup>を引用し、「すなわち、『ダ』と『ジャ』の先後関係は決めがたく、連用形を通して並行発生したとみる。阿波方言に『ダ』の終止形が認められない理由としては、まことに魅力的な解釈である。」としている。恐らく、徳島県の方言では「であ」が「ジャ」にも「ダ」にも言い切り(終止形)以外で変化したことは間違いない。ただし、この「並行的な変化」が県内各地、あちこちで発生したとは考えにくい。上野智子(1985)も指摘しているように、山分(東祖谷山村・上那賀町・木頭村などの山間部)ではダッタ、ダロ(一)は稀であり、ジャッタ、ジャロ(一)がこの地域ではよく使用される。図2・図3でもこの地域ではジャが中心である。図2・図3ではともにジャロ(一)・ジャッタにおける「ジャ」の分布とダロ(一)・ダッタにおける「ダ」の分布に地域差があるということである。主として「ジャ」が山間部、「ダ」が徳島市内にまとまりを持つ。つまり、少なくとも山分などの地域では「であ」から「ダ」への変化が生じなかったのではないか、「であ」から「ダ」への変化は阿波方言の中心である徳島市内で発生した変化ではないかという点である。また、「であ」から「ジャ」、「ダ」への変化は並列的ではあるものの、時間的にも同時であったとは考えにくいと思われる。図2・図3から、徳島方言では「であ」から「ジャ」への変化は時間的な観点から「ダ」への変化と比較して、早期に生じたと考えられまいであろうか。一つの推論であるが、「だろう」「だった」にあたる形式は徳島市内でまず、ジャロ(一)、ジャッタに変化して周辺に伝播し、山間部にこれらの形式が及んだ。そのご、徳島市内では再度「であ」から「ダ」への変化が生じ、周辺に現在影響しつつあると考えられる。また、分布状況から山分地域など、県下のジャロー・ジャッタはダッタ・ダローに将来置き換えられるとも思われる。

「ヤ」はかつて近畿中央部方言で起きたように、阿波方言内部でも「ジャ」から胎生したと考えられないこともないが、近畿中央部方言からの影響だとすると、「ジャ」、「ダ」よりも新しい形式であると考えられる。

断定の助動詞の他、図5～図8では形容動詞について調べた結果(「静かだ」)を掲げた。まず、図5は言い切り形の場合であるが、先の図1「雨だ」の場合と異なり、活用語尾が「ジャ」のほか、シズカナの「ナ」が広く分布する。例えば、「この服、きれいなで」、「この部屋は静かななあ(「で」、「なあ」はともに文末詞)」という言い方がよく用いられる。「ジャ」と「ナ」との新旧関係については定かではない。図6「静かだろう」、図7「静かだった」、

11) 藤原(1962)の箇所を引くと、「『ジャ』の中に、『ダッタ』『ダロー』などがおこなわれている。これは、『ダッタ』で言うのと、もともと『でアッタ』が、『ジャッタ』になる反面、『ダッタ』にもなったのであろう。つまり、『ジャッタ』『ダッ』は並立的に生じたと思われる。」



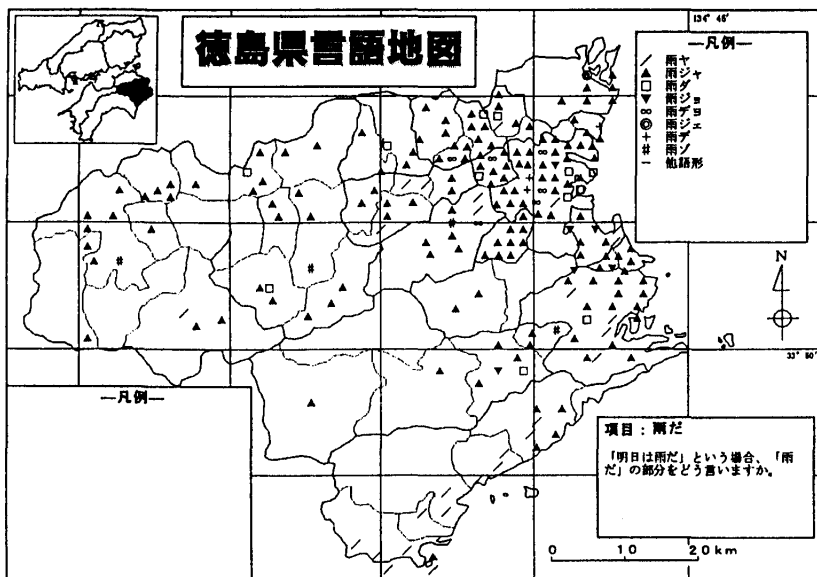


図 1

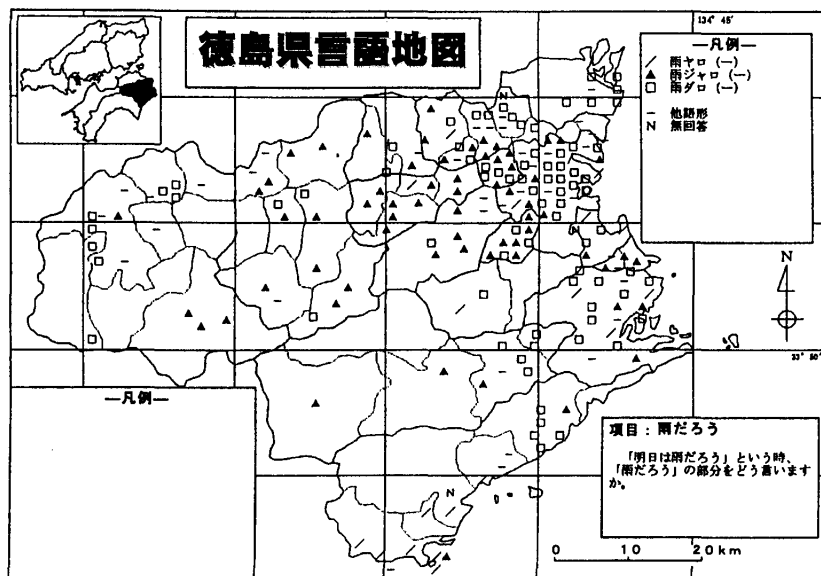


図 2

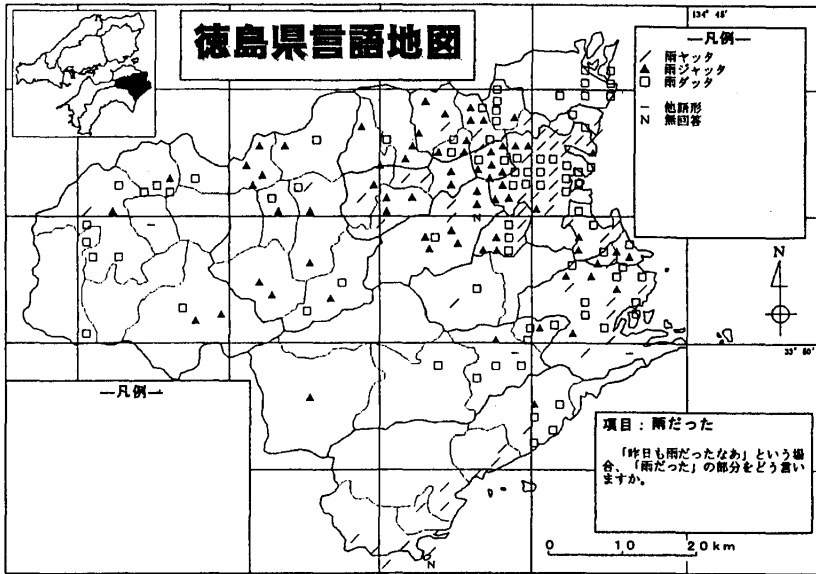


図 3

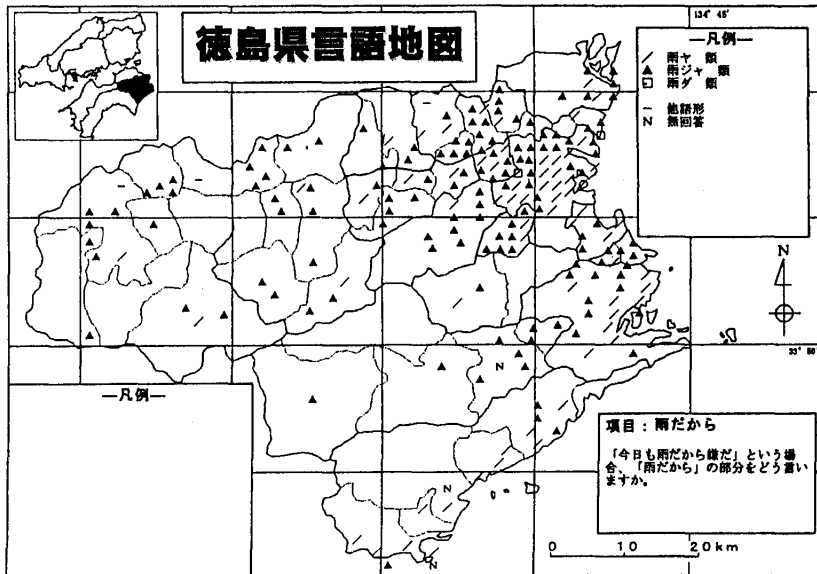


図 4

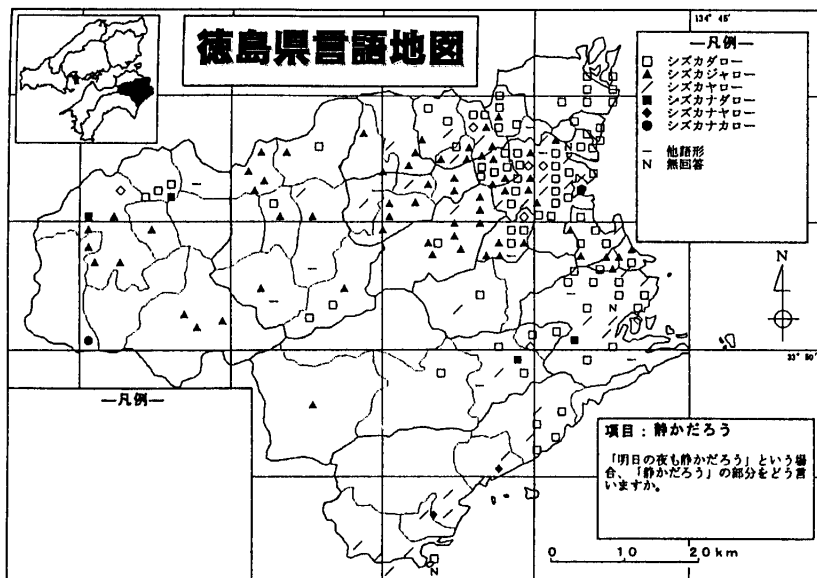


図 5

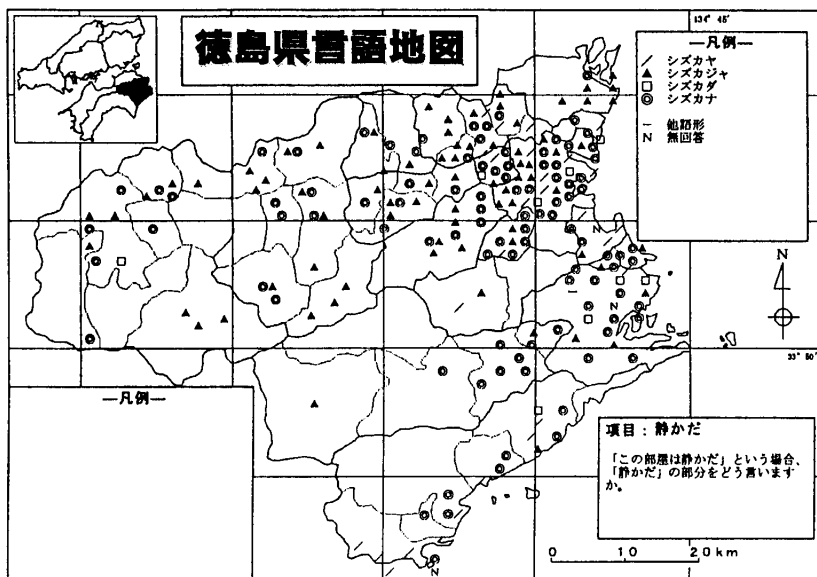


図 6

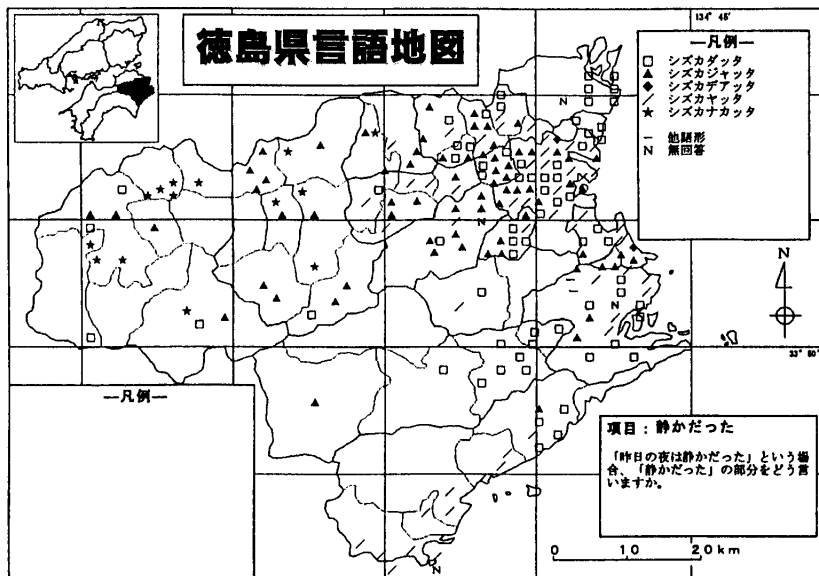


図 7

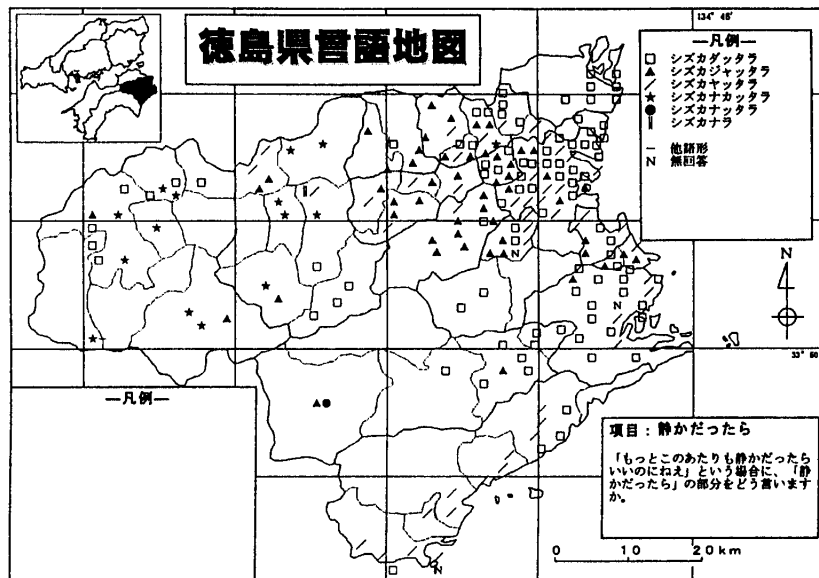


図 8

図8「静かだったら」では先の図2・図3同様、シズカダロ（一）、シズカダッタ、シズカダッたらなどの「ダ」が徳島市を中心にして県全域に拡がろうという形勢であるが、その進行も「ジャ」に阻まれているかのようにみえる。

ここでも「ジャ」が古く、「ダ」が新しいということがいえようか。なお、穴喰町を中心とする県最南部では一貫して「ヤ」である。なお、ジズカナカロ（一）、シズカナダロ（一）、シズカナヤロ（一）などの回答が県西部や県南部にみられる。これらについては更にこれらの地域での調査地点を増やして見解を述べたく思う。

## 参考文献

藤原与一（1962）『方言学』三省堂

藤原与一（1974）『昭和日本語の方言 第2巻 四国三要地方言対照記述』三弥井書店

森 重幸（1982）『徳島県の方言』『講座方言学8 中国・四国地方の方言』国書刊行会

上野智子（1985）『阿波方言の断定辞「ダ」・「ジャ」・「ヤ」』『方言研究年報』第28号  
広島方言研究所

森 重幸（1989）『徳島県の方言アクセント概観—32年後の動向—』私家版

高橋顕志（1990）『四国言語地図』高知女子大学文学部国語学研究室

高橋顕志（1991）『四国言語地図』高知女子大学文学部国語学研究室

池西郁広・富家淳夫・西本博子・藤川輝紀・宇都宮久・中村誠・野川紀幸・山下明子（1993）『大阪～徳島グロットグラム図集』鳴門教育大学大学院 '93現代語演習（友定賢治担当）

上野和昭（1997）『徳島県のことば』日本のことばシリーズ36 編集代表 平山輝男 明治書院

友定賢治（1998）『断定辞使用のゆれ—広島方言の場合—』『国語語彙史の研究17』和泉書院

金沢浩生・仙波光明・岸江信介・村中淑子・野田和子・石田祐子（1999）『穴吹町の方言』阿波学会紀要  
第45号

岸江信介・野田和子・林美佳・川島竜太・石田祐子（1999）『吉野川流域における方言の動態（1）』『徳島大学国語国文学第12号』徳島大学国語国文学学会

岸江信介・中井精一・鳥谷善史・石田祐子（2000予定）『エクセルとファイルメーカープロによる言語地図の作製』『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告第8号』大阪樟蔭女子大学日本語研究センター

（文責 岸江信介）